

苦吟派の詩——孟郊試論——

横 山 伊勢雄

序

中唐の詩は、憲宗の元和年間に一つのピークを現出する。その中心に韓愈（七六八—八二四）と白居易（七七二—八四六）を位置させて、詩風において古典化と平易化（豊田穰氏『唐詩研究』）、人脈において韓愈グループと白居易グループ（鈴木修次氏『唐代詩人論』下）と対立的な両者に概括することが一般的に行われている。あるいは両者と別に姚合（七七五—八五五？）・賈島（七七九—八四三）のグループを認める聞一多の見解（『唐詩雜論』賈島）もある。また共通性からの概括では「元、輕白俗、郊、寒島瘦」（蘇軾・祭柳子玉文）のように、元稹（七七九—八三二）と白居易、孟郊（七五一—八一四）と賈島とをそれぞれ同類視する見方があり、これには孟・賈の独自性を認める反論もある。

これらはあくまで便宜上の概括ながら時間的に横の關係

の把握でしかない。詩人達の世代のずれが無視されているのである。そこで便宜に従いつつ、そこに苦吟派という縦の關係を想定してみたい。私見では孟郊をこの派の始祖、李賀（七九一—八一七）を嫡子、賈島を分派、韓愈を三者の媒介者にしてこの派の助成者と位置づける。苦吟派と呼ぶのは、孟郊が「夜學曉不休、苦吟神鬼愁、如何不自閑、心與身爲讎」（夜感自遣・卷三）「天地唯一氣、用之自偏頗、憂人成苦吟、達士爲高歌」（送別崔寅亮下第・卷七）と自身を詠じ、また李賀が「龐眉入苦吟」（巴童答・歌詩卷三）と詠ずる如く、全身全霊をこめて苦吟しつつ独特のスタイルを生み出した詩人達をさす。その中で「孟郊詩塞澁窮僻、琢削不暇、眞苦吟而成、觀其句法格力可見矣」（隱居詩話・『詩人玉屑』卷十五苦吟）との評が定説化している孟郊については、苦吟派の始祖として、その苦吟の姿勢と詩境の再吟味が必要であると考える。本稿に孟郊試

論と名づける所以である。

一、孟郊の生涯

孟郊には貧窮詩人のイメージが濃い⁽²⁾が、果たしてそうか。不遇が苦吟へと駆り立てたのかどうか。まず彼の詩⁽³⁾、韓愈ら関係者の詩文、両唐書の伝などを資料に、孟郊の生涯を追いつながら、この設問に対する解答を試みる。

孟郊の父庭玢は、崑山の県尉に終った下級官僚であった。湖州武康県（浙江省）を本籍とする。孟郊とその弟孟鄴・鄆をもうけて卒した。母は裴氏。この母に対する孟郊の孝養ぶりは有名で、「慈母手中線、遊子身上衣、臨行密密縫、意恐遲遲歸、誰言寸草心、報得三春暉」（遊子吟・卷一）の詩に、母の慈愛と子の孝心は表象されている。孟郊はその生涯に二度妻を迎えたが、子はいずれも夭折し、彼の大きな悲哀の種となった。

両唐書に「少^{わか}くして嵩山に隱る」と見え、若い時期に隱棲の志向を示したが、その詳細は不明である。ただ、彼に世俗を厭う気持があったことは注意してよい。彼の詩で編年可能なのは、三十歳の時の河南省孟県における作からである⁽⁴⁾。嵩山は五岳の中岳で、河南省登封県の北にあるから、その少し前まで、嵩山で隱士を気どっていたのである。山を下りて河南を遊歴していたが、徳宗の建中四年

（七八三）、朱泚の反乱が起き、徳宗は奉天（陝西省乾県）に蒙塵することがあった。建中三年の作「殺氣不在邊」（卷一）には、当時の諸藩鎮の不穏な動向を察知した詩人の鋭敏な時事感覚が示されている。

孟郊は江西の上饒県に行く。貞元元年（七八五）、三十五歳であった。ついで蘇州に寓居するのが四十歳の時である。この間、『茶經』の作者陸羽と交際し、また韋応物・釈皎然（七三〇—七九九）と交際している。既に詩人として名を得ていたようだ。ここまでを孟郊の前半生とする。

貞元六年（七九〇）、四十歳の時、従叔の孟簡が進士科に應ずるのを送別したと、万年県令・都官郎中陸長源に贈詩したことは注目してよい。孟郊は排行十二で、族叔・族兄弟が多く、ことに郡望の山東平昌の孟氏には高級官僚が多い。中でも孟簡は出世頭で、貞元七年進士及第、諫議大夫、御史中丞、工部・戸部侍郎を歴任、山南東道節度使や襄州刺史を務め、長慶三年（八二三）に卒している。詩を善くし、『全唐詩』に今七首を存する。孟簡は従叔とはいえ孟郊より年少で生涯に涉るよき親族の一人であった。彼の応試が孟郊に刺激を与えたのであろう。孟郊は四十一歳の秋（貞元七年、七九一）、湖州の郷貢進士に挙げられ、長安に出る。あるいは陸長源の勧めがあったかも知

れぬ。⁽⁷⁾この陸長源は、貞元十五年（七九九）二月に汴州宣武軍節度使の任に在って部下に殺されるまでの十数年間、孟郊のよきパトロンであった。両者間の詩の唱酬も多い。⁽⁸⁾

貞元八年（七九二）、進士科に下第。この時、韓愈・李観（七六六―七九四）・王涯が進士に登第している。この年の礼部試は兵部侍郎陸贄が知貢舉で、右補闕梁肅が試験官であった。孟郊に、温巻と思われる詩「古意贈梁肅補闕」（卷六）がある。また李観に「上梁補闕薦孟郊崔宏禮書」（文編・卷五）の文章、韓愈に「孟生」（昌黎集・卷五）の詩がある。これらによれば、孟郊と兩人との交際は、貞元七年の冬か、翌八年の春に、始まっている。孟郊が、「贈李観」（卷六）の詩の題下に「観初登第」と注し、下第後東帰の際に「長安留別李観韓愈因獻張建封」⁽⁹⁾（卷七）の詩に始めて韓愈の名を李観と並べて示した所を見ると、江東出身の李観が韓・孟の二人を引き逢わせたのかも知れぬ。しかし、一方、孟郊を徐州節度使張建封に推薦したのは、李翱（？―八四五？、貞元十四年、七九八、進士）であった。李翱は後に韓愈の姪を娶り、韓愈は張建封の幕僚になるといふ因縁があるが、『旧唐書』の孟郊伝では、この李翱に洛陽で知遇を得、ついで韓愈に会って忘形の契を結んだと、李翱が紹介者らしい書き方をしている。ただ洛

陽でというのは三者の経歴からも信用できない。

ところで、彼等は孟郊をどのような詩人と見ていたのであろうか。李観の推薦文では、「孟之詩、五言高處、在古無上、其有平處、下顧兩謝」と言う。韓愈の詩では、「孟生江海士、古貌又古心、嘗讀古人書、謂言古猶今、作詩三百首、宿默咸池音」と言う。また李翱の「薦所知於徐州張僕射書」では、李観と韓愈の右の文句を引用しながら、「郊爲五言詩、自前漢李都尉、蘇屬國、及建安諸子、南朝二謝、郊能兼其體而有之」（李文公集・卷八）と具体的に述べている。孟郊は五言詩において漢魏詩及び謝靈運・謝朓の詩を凌ぎ、それらの詩様式を兼備している詩人と、極めて高い評価を与えていた。その孟郊が古人の書を読み、古心を養い、古貌を備えていると言うからには、古文復古の旗手達にとって、彼は尊敬に値する人物と映じていたはずである。右が推薦のための美辞でないことは、韓愈が、「低頭拜東野、願得終始如驅蛋、東野不廻頭、有如寸筵撞巨鐘」（醉留東野・卷五）と、孟郊を巨鐘に、己を寸筵に譬え、諸諺で以て、両者の詩壇における位置を示す点でも判る。韓・孟に対する世評は「孟詩韓筆」⁽¹⁰⁾であり、詩においては孟郊が韓愈の師であり或いは兄であって、孟郊が韓愈の門人ということはありません。二人の生涯に涉つ

てその関係は変らないのである。

ともあれ、韓愈等にいにしよ古ぶりの既に一家を成した詩人として孟郊は認められていた。では孟郊は、その古詩様式をどのような詩人達から得ていたのか。いま試みに孟郊の詩句に詠み込まれた詩人名を示せば、屈原（頻度数8）王粲（5）元瑜（阮瑀1）阮籍（2）嵇康（2）陶淵明（5）謝靈運（4）謝朓（2）李白（5）、並称で建安・七子・曹（植）劉（楨）・徐（陵）庾（信）・李杜（各1）、他に文人として宋玉（3）賈誼（3）司馬相如・禰衡（各1）となる。かく孟郊の関心の向く所を見ても、李翱の評が孟郊をよく知る者に出たものと知れよう。孟郊の関心が、「康樂寵詞客、清宵意無窮」（夜集汝州郡齋…・卷五）、「天寶太白沒、六義已消歇」（讀張碧集・卷九）など、詩観に渉るものは注目すべきであるが、今は省く。

むしろここでは、四十二歳の孟郊が、韓愈に既に、「顧我多慷慨、窮簷時見臨、清宵靜相對、髮白聆苦吟、採蘭起幽念、眇然望東南」（孟生）と、独特の苦吟詩人と見なされていた点に注目をすべきであろう。韓愈は後にまた、「有窮者孟郊、受材實雄驚、冥觀洞古今、象外逐幽好、橫空盤硬語、妥帖力排冓、敷柔肆紆餘、奮猛卷海濤」（薦士・集卷二）と、少しく敷衍して詠じているが、さすがに韓

愈は目が高い。孟郊が人事と自然の奥底を洞察して、それを硬質の言語で詩化する、両面性の詩人であり、時に柔く、時に猛く、極めて振幅の大きい詩境を有すると見ていたのである。この両面性については後に触れる。

急ぎ孟郊の事歴を略述する。貞元九年（七九三）、再び進士科に应じて下第。朔方に遊び、更に楚・湘に遊ぶ。彼の詩に屈原が頻出するのは、この時の紀行詩においてである。洞庭から汝州（河南省臨汝県）に廻り、刺史陸長源を頼る。

貞元十一年（七九五）、三たび進士科に应じて下第。翌十二年、四十六歳の孟郊は、四度目の挑戦でようやく進士に登第した。長安から帰郷の途中、和州（安徽省歷陽県）に立寄って、張籍（七六八—八三〇、七九九年進士）を知り同遊する。貞元十三年、汴州に行軍司馬陸長源を頼り寄居。貞元十五年春、汴州に反乱が起こり、乱を避けて、蘇州や越中の山水に遊ぶ。

貞元十六年（八〇〇）、五十歳でようやく銓選に当たり溧陽（江蘇省）の県尉に任官、母を迎養する。しかし彼は勤勉な官吏ではなかったらしい。陸龜蒙の「書李賀小傳後」の文には、「予爲兒童時、在溧陽聞白頭書佐言。孟東野、貞元中以前秀才、家貧受溧陽尉。溧陽昔爲平陵。縣南

五里有投金瀨、瀨南八里許道東有故平陵城。(中略)除里民樵單外無入者。東野得之忘歸、或比日、或間日、乘驢領小吏徑舊投金渚。一往至則蔭大櫟、隱叢篠、坐于積水之旁、苦吟到日西而還。爾後袞袞去、曹務多弛廢。令季操下急、不佳東野之爲、立白上府、請以假尉代東野、分其俸以給之、東野竟以窮去」(甫里先生集・卷十八)と聞き書きが記され、『新唐書』の伝にもこの事が記されている。陸龜蒙の文章は、李賀が驢に乗り、小童を従え、背に古い破錦囊を負って出遊し詩作したとと孟郊の逸話とを、詩に淫した典型として述べたものである。この二詩人に「推敲」の賈島を加えれば、晩唐には既に驢馬の背で苦吟する貧窮詩人という苦吟派のイメージが定着していたと言えよう。苦吟派の詩人にとっては、詩作が至上の行為であって、他の文人官僚のように詩を官職より下位に置くことはないのである。

ともあれ孟郊は県尉を辞し、弟に母を常州の義興莊に連れ帰らせて、自身は長安に出て寓居する。憲宗の元和元年(八〇六)、五十六歳、国子博士韓愈の城南の別業に入り、韓愈と聯句十三首を作る¹¹⁾。韓愈と最も親密に交わった時で、韓愈も後に「喜君眸子重清朗、攜手城南歷舊遊、忽見孟生題竹處、相看淚落不能收」(贈張十八助教・

卷九)と、眼病の癒えた張籍と共に、孟郊を偲んでいる。孟郊が聯句を作った頃、張籍も長安に居たし、また孟簡も刑部員外郎として長安に居て韓愈と交際を持っていたことは「雨中寄孟刑部幾道聯句」(卷八)が示している。

この年、韓愈と李翺が東都留守鄭餘慶(七四五―八二〇)に孟郊を推薦し、河南北陸運從事・試協律郎の官を得た孟郊は洛陽に移って立德坊に新居を構えた。漸く長い仮寓生活を終えて、以後元和九年(八一四)、六十四歳の春まで、あしかけ十年間を洛陽で平穩に晩年を送る。この間、元和四年に母裴氏卒。韓愈は元和二年に洛陽分司、同四年に都官員外郎洛陽分司、五年には河南尹と昇官し、元和八年三月に比部郎中・史館修撰となって長安に戻るまで、洛陽に勤務していた。元和六年春、三十二歳の賈島が韓愈を訪ね「投孟郊」(長江集・卷二)の詩を作り、孟郊は「戲贈無本」(卷六)の詩で応えた。冬に范陽(河北省)に帰った賈島は「寄孟協律」(卷二)の詩も送っている。孟郊が洛陽で交際した他の詩人には、盧殷(七四六―八一〇)・劉言史(？―八一二?)・盧仝(七九五―八三五)・王涯(七六五―八三五)・劉叉(?)・王建(?)・鮑溶(八〇九年進士)等がいた。いずれも個性の強い詩人達である。

元和九年(八一四)、六十四歳、山南西道節度使鄭餘慶

に招かれ、興元軍参謀・試大理評事の辞令を受けて洛陽を出発した孟郊は、河南の閩郷県で急病にかかり卒す。時に八月己亥日。鄭餘慶が数万錢を与えて葬り、家族の生活の面倒をみた。孟郊前半生のパトロンが陸長源、後半生のそれは鄭餘慶である。この鄭餘慶は、王叔文・柳宗元等の政治改革派が敗退した時、憲宗によって尚書左丞同中書門下平章事となっている。つまり保旧派の代表格で宰相となつたのである。韓愈・孟簡もこの人脈につながることは注意してよい。

上述のように、孟郊の生涯は、官途にあつては不遇と言えるし、官界で昇進する人々と比較すれば貧窮であつたとも言えよう。当人においても不遇感と貧窮感は強烈であつた。慷慨の詩、咳きの詩にそれは顕著に反映している。故に後人は彼を不遇貧窮の中でやむなく苦吟を重ねた詩人として同情する。しかしそれは孟郊の詩の虚構的増幅に眩惑されているのである。彼の生涯は結構我意を通した自由な生き方であつた。彼の好みが杜甫ではなく李白にあつたのも首肯できる各地での遊歴がそれを証している。官僚としては不遇であつたが、詩人としてはかえつて幸福であつたのだ。それを可能にしてくれたのは各地にいる同族の孟氏であり、有力な官僚達であり、友人達であつた。

孟郊の全詩五百十一首中、詩題に示された人名は百十五人を数える。たとえば、李瓦（二首、御史大夫・河陽節度使）、陸長源（十首）、盧虔（五首、侍御史・復州刺史）、張建封（四首、徐州節度使）、樊沢（襄州刺史・礼部尚書）、劉復（侍御史洛陽分司）、王楚（御史中丞）、呂渭（礼部侍郎）、李益（二首、侍御史）などの高官、房次卿（京兆興平尉）などの同列官、岑秀才等の後輩、中でも目立つのは長文上人等の僧侶・道士二十二名である。一族の者が一割、道仏者二割、官吏七割というのが、その大体の色分けであつた。これほど多数の人を詩題に取りこんでいて、彼が孤独に沈潜してばかりいたはずはない。

孟郊が嵩山に隠れるのを止めて、世俗に詩人として名を得、官界にすがつていたのは、彼は山水を愛しながら、それ以上に人間を愛したからに違いない。彼にとって官界は榮達を求める場ではなく、好ましい人物と交際する場であつたのだ。更に極言すれば、詩人としての名声を維持する場であつた。幸福にも彼は、その死を韓愈「貞曜先生墓誌銘」（卷二十九）、賈島「哭孟郊」（「弔孟協律」（卷三）、王建「哭孟東野」二首（『唐音統籤』引）によって飾られた。貞曜先生は張籍が孟郊に捧げた私諡である。晩年の孟郊は、万年課長のような官職にいながらも、詩壇の先輩詩人

として詩友や後輩詩人達から尊敬を受けていた。彼もまたほとんどその全精力を詩に注いで、それに応えていたのである。

二、孟郊の苦吟

孟郊は、人生態度としては元々「達士」志向が強かった。だが達士には成り切れなかった。「達人識元氣、變愁爲高歌」(達士・卷二)とはいかず、憂愁の中で苦吟している。それは天与の資質による癒し難い病癖、つまり詩癖によると彼は考えていた。友人が「勸我少吟詩、俗窄難爾容」と忠告してくれたのに答える形で「天疾難自醫、詩癖將何攻」(勸善吟・卷二)というのがそれである。詩を人生の第一義と認めない時世に、それを主張するには詩癖のポーズしかない。詩癖は異端なのである。異端は時に踏晦する。

餓犬齧枯骨 餓犬 枯骨を齧み

自喫饑飢涎 自ら喫む饑飢の涎

今文與古文 今文と古文と

各各稱可憐 各各可憐を稱するは

亦如嬰兒食 亦嬰兒の食うに

錫桃口旋旋 錫桃 口に旋旋するが如し

唯有一點味 唯一点の味有れば

豈見逃景延 豈逃景の延ぶるを見んや

繩床獨坐翁 繩床 独坐の翁

默覽有所傳 默覽 伝うる所有り

終當罷文字 終に當に文字を罷め

別著逍遙篇 別に逍遙篇を著すべし

從來文字淨 從來 文字の淨きは

君子不以賢 君子 以て賢とせず

「偷詩」(卷三)である。題も内容も皮肉に満ちている。

彼とて詩の第一義は六義にあり、李白が「大雅久不作、吾衰竟誰陳」(古風其一・李太白詩卷二)と唱えて後消滅している詩風を興そうと努力したこともあった。儒教の倫理に基づく樂府の諸作はその実践であり、張籍・王建や白居易の新樂府の先驅であった。しかし孟郊はすぐにその無力さを知る。「大雅難具陳、正聲易漂淪」(答姚怱見寄・卷七)のが今の世であった。「義淚沾衣巾」(同上)も甲斐ない世と見えたのである。従って詩は立言の功名を求め得る行為にならない。「本來文字達、今因文字窮」(歎命・卷三)の齟齬が生じてくる。「陳詞備風骨」(讀張碧集・卷九)のも「誰作採詩官、忍之不揮發」(同上)と無理が伴う。「再舉七子風」(上包祭酒・卷六)と力んでも空しい外交辭令でしかない。

かく孟郊がしだいに儒家の詩觀から離れるのも無理のな

点がある。彼はそもそも儒教そのものに疑いを抱いた。彼も一度は世に出ようとの壮志を持ったことがあった。「丈夫四方志、女子安可留」(車遙遙・卷一)と。それは「壯士心是劍、爲君射斗牛、朝思除國讎、暮思除國讎」(百憂・卷二)という激しいものであった。しかし力を振る場を得なければ、「丈夫久漂泊、神氣自然沉」(病客吟・卷三)とならざるを得ない。だがこうした剛直の壮士ぶりが、彼に次のような激しい作品を作らせたことは特筆してよい。「吊國殤」(卷十)という内戦による戦死者を弔う詩である。

徒言人最靈 徒に言ふ人は最も靈なりと

白骨亂縱横 白骨 乱れて縦横たり

如何當春死 如何ぞ春に當って死し

不及羣草生 羣草の生ずるに及ばざるや

堯舜宰乾坤 堯舜は乾坤を宰し

器農不器兵 農を器^づりて兵を器^づらず

秦漢盜山岳 秦漢は山岳を盗み

鑄殺不鑄耕 殺を鑄^づりて耕を鑄^づらず

天地莫生金 天地 金を生ずる莫れ

生金人競争 金を生ずれば人競争す

社会の表相を批判するよりもつと根源的な人間惡の批判

が、孟郊の目指した「風雅」の道であったのだ。批判のきっかけが、現実には相繼ぐ藩鎮の反乱にあることは言うまでもない。また一方には政争の現実がある。人間は何故かくも過剰な欲望を抱いて闘争するのか、孟郊は自ら問い自ら答えるために心を苦しめる。彼は「求友」「結交」(卷三)の詩が示すように、小人の交を斥けて君子の交を求めた。唐人の友情尊重の氣風をことに濃く彼は有していたことは、交際の広さで知れる。しかし人は欺き合うことが多い。それを孟郊は獸心と言う。「獸中有人性、形異遭人隔、人中有獸心、幾人能眞識、古人形似獸、皆有大聖德、今人表似人、獸心安可測、雖笑未必和、雖哭未必戚、面結口頭交、肚裏生荆棘」(擇友・卷三)かく人性を批判する底には、人の性は果たして善なのかとの懷疑があるろう。

孟郊の眼は、懷疑のうちに皮肉を帯びる。「惡詩皆得官、好詩空抱山」(懷惱・卷四)の世相、「詩人業孤峭、餓死良已多」(哭劉言史)「詩人多清峭、餓死抱空山」(弔盧殷十首其一・卷十)の相繼いで詩友が窮死する現実、己もまた「無子抄文字、老吟多飄零」(老恨・卷三)の恨を抱いている。「有文死更香、無文生亦腥」(弔盧殷其十)と文学を人生の清業と心得て励んできた。だがその文学は、詩は、世俗的には無力であったのか。「教坊歌兒」(卷三)には、

十歳小兒 十歳 小小の児

能歌得朝天 歌を能くして天に朝するを得たり

六十孤老人 六十 孤老の人

能詩獨臨川 詩を能くして独り川に臨む

去年西京寺 去年 西京の寺

衆伶集講筵 衆伶 講筵に集い

能嘶竹枝詞 能く竹枝の詞を嘶りて

供養繩床禪 供養す 繩床の禪

能詩不如歌 詩を能くするは歌に如かず

悵望三百篇 悵望す 三百篇

詩の無力さへの自嘲と共に詩三百風雅の道への懷疑的詠嘆がこめられている。それは儒教そのものへの懷疑となる。

「自惜」(卷三)の詩は悔恨さえ伴う。

傾盡眼中力 傾け尽す 眼中の力

抄詩過與人 詩を抄して人より過ぐ

自悲風雅老 自ら悲しむ風雅に老ゆるを

恐被巴竹嘖 恐らくは巴竹の嘖を被らん

零落雪文字 零落たり 雪文字

分明鏡精神 分明なり 鏡精神

坐甘冰抱晚 坐して冰を晩に抱くに甘んじ

永謝酒懷春 永く酒に春を懷ぶを謝す

徒有言言舊 徒に言言の旧き有りて

慙無默默新 默默の新しき無きを慙ず

始驚儒教誤 始めて儒教の誤れるに驚き

漸與佛乘親 漸く仏乗と親しむ

孟郊は儒教に反撥して仏教に親しむ。「垂老抱佛脚、教妻

讀黃經、經黃名小品、一紙千明星、曾讀大般若、細感勝蟬

聽」(讀經・卷九)とそれを妻にも求める。儒教の称揚の

ために仏教を異端として激しく排斥した韓愈の門人では吐

けぬ詩句である。孟郊は独自の思想的煩悶を有していた。

生活的には安定していた晩年に殊に煩悶が深いのは、死の

問題をかかえたからである。「獨問冥冥理、先儒未嘗言」

(悼吳興湯衡評事・卷十)、相繼ぐ知友の死に当面し、老

いたる身を顧て、死後の世界を考えるに、先儒は孔子に倣

ってそれに言及しない。天に問うも、「欲上千級閣、問天

三四言、……一寸地上語、高天何由聞」(上昭成閣不得於

從姪僧悟空院嘆嗟・卷九)、地上の咄などに答えてくれな

い。そこで孟郊は上人と交わり仏寺を訪ね、仏の道を聞く

が、魂の救済を得ることはなかった。「不得爲弟子、名姓

掛儒宮」(夏日謁智遠禪師)、結局彼は儒生に終わったので

ある。

孟郊が学に苦しみ、職に苦しみ、生に苦しみ、母・妻・

子への愛に苦しんだのは事実である。それらの人生苦を乗り越えてともかく六十四年の人生を歩んだ。だが人生の苦しい現実の中で抱いた人間性への懷疑と思想的煩悶は絶望的な深淵へ彼を沈潜させた。詩人としてその底から言語を浮上させ紋様を描くには、それにふさわしい詩語を新たに組織せねばならない。まず刻意つまり精神上の苦吟があり、継いで彫琢つまり言語上の苦吟があり、その総体として詩の苦吟がある。これが所謂苦吟派の苦吟なのであって、表現の奇を求めるために篆刻彫虫する後世の模倣者の苦吟とは、本質的に異なるものであった。

三、孟郊の詩境

孟郊の詩がすべて苦悩の末に紡がれたというのではない。『旧唐書』の伝は、「性孤僻寡合」と言い、『新唐書』の伝でも「性介少諸合」と言って、孟郊の人嫌いを強調するが、彼が当時としては平均的以上に人と交際をしていたこと、前述の通りである。そこから一群の交際詩というべき作品が生まれた。これらは相手を考慮して常識的作風に依っているもので、百余首ある。

次に楽府詩六十五首が一群を成す。内、新楽府は六首しかないが、張籍と王建の所謂張王の楽府と喧伝される二人がそれを承けている点は注目してよい。

織婦辭（卷二）

夫是田中郎 夫は是れ田中の郎

妾是田中女 妾は是れ田中の女

當年嫁得君 當年 君に嫁し得て

爲君秉機杼 君が為に機杼を秉る

筋力日已疲 筋力 日に已に疲るるも

不息窗下機 窗下の機を息めず

如何織紵素 如何ぞ紵素を織るに

自着藍縷衣 自らは藍縷の衣を着るや

官家勝村路 官家 村路に勝し

更索栽桑樹 更に桑樹を栽うるを索む

孟郊の楽府詩の中で、社会性の強い作品は、楽府詩の屬性に従って、表現は平易であり、論理は明快である。評価すべきは「織婦辭」のように、生産と搾取の社会矛盾を鋭く暴露する発想の新しさにある。彼の楽府はほとんど五言であるが、七言の作が八首あり、その発想と措辞にも独創性が認められる。「湘妃怨」「巫山曲」（卷一）の幻想性、「絃歌行」（卷一）の怪奇性は、李賀詩の先駆と言えよう。

絃歌行

驅雛擊鼓吹長笛 驅雛 鼓を撃ち長笛を吹く

瘦鬼染面惟齒白 瘦鬼 染面 惟齒白し

暗中崋崋拽茅鞭 暗中 崋崋として茅鞭を拽き

保足朱禪行戚戚 保足 朱禪 行くこと戚戚たり

相顧笑聲衝庭燎 相顧て 笑聲 庭燎を衝き

桃弧射矢時獨叫 桃弧 矢を射てば 時に独り叫ぶ

追離の行事のおどろおどろしさが、怪奇なイメージとなつて美事に形象化された作品で、孟郊の特異な美意識をも示している。

しかし、孟郊の詩の本領は、韓愈が「冥觀洞古今、象外逐幽好」と評する人事と自然を詠じた詩つまり詠懷詩と詠景詩に在る。両者は截然と分かれてはいず、むしろ融合して詩境を高めている場合が多い。これらの作品の中で、孟郊が詩人としての心血を注いだと思われる連作の詩群に、彼の詩の特徴は凝縮的に現われている。仮りに二群に分ければ、「石淙十首」(卷四)「看花五首」(「濟源寒食七首」)「寒溪九首」(「立德新居十首」(卷五)が景物をモチーフとする点で一群となる。他は、「感懷八首」(卷二)「秋懷十五首」(卷四)と「送淡公十二首」(卷八)「吊元魯山十首」(「杏殤九首」「弔盧殷十首」(卷十)の詩群で、後の四者は特定の人を対象とする点で特殊である。なお「峽哀十首」(卷十)もこの群に属するが、前群的な要素も多い。まず前群の詩から二首を引く。

石淙 其五

空谷聳視聽、空谷に視聽を聳^{そび}やかし
幽湍澤心靈 幽湍に心靈を^{うる}沢す

疾流脫鱗甲 疾流 鱗甲を脱し

疊岸衝風霆 疊岸 風霆を衝く

丹巘墮瓊景 丹巘 瓊景を墮^{おと}し

霽波灼虛形 霽波 虚形を灼^やく

淙淙壓厚軸 淙淙として厚軸を壓^{おさ}ち

稜稜攢高冥 稜稜として高冥を攢^つ

弱棧跨旋碧 弱棧 旋碧に跨^{また}がり

危梯倚凝青 危梯 凝青に倚^よる

飄飄鶴骨仙 飄飄たり鶴骨の仙

飛動鼈背庭 飛動す 鼈背の庭

常聞誇大言 常て聞く 誇大の言

下顧皆細萍 下顧すれば 皆細萍

寒溪 其二

洛陽岸邊道 洛陽 岸邊の道

孟氏莊前溪 孟氏 莊前の溪

舟行素冰拆 舟行 素冰拆^とけ

聲作青瑤嘶 聲は作^なす 青瑤の嘶^{むせ}び

緑玉結緑玉 緑水 緑玉を結び

白波生白珪 白波 白珪を生ず

明明寶鏡中 明明たり 宝鏡の中

物物天照齊 物物 天照^{ひと}齊し

仄歩下危曲 仄歩して危曲に下り

攀枯聞孀啼 枯を攀りて孀啼を聞く

霜芬稍消歇 霜芬 稍く消歇し

凝景微茫齊 凝景 微かに茫齊す

凝坐直視聽 凝坐して視聽を直くし

躑行失蹤蹊 躑^{とうこう}行して蹤蹊を失す

岸重斷棘勞 岸重なりて棘を斷るに勞れ

語言多悲悽 語言 悲悽多し

「石淙」は、貞元九年、二度目の応試に失敗し、朔方に旅した時、夏州（陝西省横山県）での作。編年詩中、最初の連作で、文字の彫琢に苦心が窺える。谷間の早瀬と岩壁の形状を言語によって再造型しようとする意欲的な作品だが、多くの句が二字目に名詞を置いてそれに形容詞を冠する語法、三字目の所謂句眼に配した多様で奇抜な動詞の措辞と技巧が露わである。結び四句の感慨も常套を出ない。だが壮大なスケールの造型力は世間を驚嘆させ詩人の名声を博するには充分なものがあつたであらう。

「寒溪」は、元和二年の冬、洛陽での作で、前作から十四年を経ている。前半の水面の描写、後半の叙景には、感覚の冴を示しつつも斧鑿の痕を感じさせない点で表現の成熟が認められる。またその心情は景物に反して屈折しており、行間が深い。「石淙」では「再吟獲新勝」（其九）と勝景を詩によって新たな美に再造型しようとしていた。当時は進士下第の間に江南を逍遙し、「道勝不知疲、冥搜自無斁」（遊韋七洞庭別業・卷四）「探奇誠淹留」（越中山水・卷四）と、奇勝を探り自然の奥なる真美を搜して飽くことがなかつたのである。自然は新しい感覚で臨めば、「視聽改舊趣、物象含新姿」（同年春臚・卷五）と、新しい美を発見できた。だが人間の有様に懷疑をもち絶望すると、自然さえも変色してくる。それを描写する場合、苦吟は質を変え、言葉から精神へと内面化せざるを得なくなる。そうした苦吟は陰鬱な発想を生む。

孟郊の真の苦吟による代表作としては、「秋懷十五首」を挙げたい。これと「峽哀十首」並びに「感懷八首」とは、共に製作年代が比定し難い無場の詩である。それだけに作品としての独立性は強いと言えよう。ただ、「感懷」は阮籍の「詠懷詩」の影響を生る形で留めており、比較的早い時期の作と思われる。「秋懷十五首」は老詩人の詠懷にそ

の人生の凝縮を籠めた作で、韓愈の「秋懷十一首」(卷一・元和九年作)に影響を与えたと考えてよい点でも、孟郊の詩業の中で位置は高い。

其二

秋月顔色冰	秋月	顔色	冰り
老客志氣單	老客	志氣	單なり
冷露滴夢破	冷露	夢に滴つて破れ	
峭風梳骨寒	峭風	骨を梳 <small>く</small> つて寒し	
席上印病文	席上	病文を印すれば	
腸中轉愁盤	腸中	愁盤 転 <small>よ</small> ず	
疑懷無所憑	疑懷	憑る所無く	
虛聽多無端	虚聴	多く端無し	
梧桐枯崢嶸	梧桐	枯れて崢嶸	
聲響如哀彈	聲響	哀彈の如し	

其五

竹風相憂語	竹風	相憂 <small>す</small> りて語り
幽閨暗中聞	幽閨	暗中に聞く
鬼神滿衰聽	鬼神	衰聴に満ち
恍惚難自分	恍惚	として自ら分かち難し
商葉墮乾雨	商葉	乾雨と墮ち

秋衣臥單雲 秋衣 單雲と臥す

病骨可劓物 病骨も 物を劓きるべし

酸呻亦成文 酸呻も 亦 文と成る

瘦攢如此枯 瘦は攢づられて此の如く枯れ

壯落隨西曛 壯は落ちて西曛に随ふ

最長一線命 最長たり一線の命

徒言繫網緼 徒に言ふ 網緼いんぐんに繋ぐと

右いづれも、衰残の身で詩に命をかけて呻吟する苦吟の姿そのものが詩材として、客観と主観をないまぜて表現されている。その感覚の特異さ、用語の鋭角さは、正しく孟郊の特質を示すものである。彼は自身を「孤骨」(其一)、病骨(其五・十三)、古骨(其十四)、老骨(其三)、老客、老人(其十・十三)詩老(其十四)と称し、老を強調する。「幽苦日日甚、老力步步微、常恐暫下床、至門不復歸」(其十一)という体力の衰えに人生の秋を感じ、「老泣無涕洟、秋露爲滴瀝」(其一)と秋の景物は我が為に在ると感じるからである。就中詩人として恐れるのは感覚の衰えであった。「老人朝夕異、生死每日中、坐隨一瞬安、臥與萬景空、視短不到門、聽澁詎逐風」(其十)という「視聴」の語は、孟郊が重視したもので、先に引いた石淙其五・寒溪其二などにも見えていた。前の兩詩に見たように彼は視覚・聴覚

を能動させて景物の特質をよく捕捉していたが、今は受動的に受け入れるしかない。それも秋懷詩では毎首の如く虫声と風声が現われるように、専ら聴覚が作動している。これが何を意味するかといえは、詩がより思索的になったということである。「流運閃欲盡、枯析皆相號、棘枝風哭酸、桐葉霜顏高、老蟲乾鐵鳴、驚獸孤玉咆、商氣洗聲瘦、晚陰驅景勞、集耳不可遏、噓神不可逃」(其十二)この警拔の詩句は、その産物であった。孟郊が感覺派の詩人に終らなかつたのは、これまで述べたように詩の思想性を重んじたからである。「秋懷詩十五首」の其十五は次のように歌われ、全体を締め括っている。

詈言不見血 りげん 血を見ざるに
殺人何紛紛 人を殺すこと何ぞ紛紛たる
聲如窮家犬 声は窮家の犬の如く
吠寶何闐闐 寶に吠ゆること何ぞ闐闐たる
胃痛幽鬼哭 胃痛むれば幽鬼も哭し
詈侵黃金貧 詈侵せば黄金も貧す
言詞豈用多 言詞 豈多きを用いんや
憔悴在一聞 憔悴は一聞に在り
古詈舌不死 古詈 舌死せず
至今書云云 今に至るも書に云云す

今人詠古書 今人 古書を詠ずれば
善惡宜自分 善惡 宜しく自ら分かつべし
秦火不焚舌 秦火 舌を焚かず
秦火空焚文 秦火 空しく文を焚けり
所以詈更生 所以 詈 更に生じ
至今橫網緼 今に至るも網緼に横にす

この詩の主題が、惡意を持った言葉の横行を批判するものであることは言うまでもない。ここで注意しておきたいのは、晩年の孟郊が「窮家犬」のように、譬喩的にイメージを概念化する手法を顯著な特色として持つ点である。彼が名詞に形容詞を冠してイメージを具体化することを好むことは既に述べた。それがイメージの概念化に深化する。たとえば動物に形容詞を冠する場合、いずれもマイナス要素に概念化される。饑馬・凍馬・飢鳥・哀猿・餓犬・飢蚊・餓虎・餓燕・斷猿などがそれである。飢童・餓劍の用例まである。彼はマイナス点に視座を据えて、世情を見る型の詩人であつたと言えよう。これは正に李賀に継がる苦吟派の詩人の発想である。

四、結語

これまで孟郊が精神の求心と遠心の両性をもつ型の詩人であることを考察して来た。その遠心性は他者との交流の

活潑さに現われている。その典型は韓愈との交流で、聯句を除く外に、孟郊から韓愈に与えた詩は十首、その逆は八首で、詩友中最も多い。まさに孟郊が賈島に戯れに「詩骨聳東野、詩濤湧退之」(戲贈無本二首其一・卷六)と言うように詩壇の兩雄を誇った詩友であった。しかも自分を前に置く所に孟郊の詩人としての自負がある。

遠心性の第二は、官途に就いたことに現われる。しかしあまり強くない。彼には官職を遮二無二追求する意欲が乏しい。官界での体験はむしろ求心的に沈潜し、社会に眼を向けるべき地位にある者としては「寒地百姓吟」(卷三)などの社会性の強い詩に義務的に遠心性を働かせているだけである。知識人達の関心が官界や政治に向けられている時に、孟郊の関心は人間そのものに向けられていた。

孟郊は自然に対しても自己を融合させようとはしない。「天地入胸臆、吁嗟生風雷、文章得其微、物象由我裁」(贈鄭夫子魴・卷六)と一度自然を自己の内に取りこむのである。求心性の現われといつてよい。

彼は自己の人生に対しては自虐的にマイナス視する。視座は人間についての懷疑・不信・絶望とつながっているかに見える。それは集の卷二から卷三・四にかけて感興・詠懐の目の下に収録された詩の題が、ほとんど二字で審交・

怨別・傷時・寓言・罪松などと題してあることによってもわかる。⁽¹⁸⁾彼は普遍的命題について思索しつつ、それにそぐわぬ自己の存在を慨嘆するのである。この求心性は心と言葉の苦吟を伴わねば詩化されない。苦吟派の特質はここに存するのである。蘇軾が、「孤芳擢荒穢、苦語餘詩騷」(讀孟郊詩二首・其一)「我憎孟郊詩、復作孟郊語、飢腸自鳴喚、空壁轉饑鼠、詩從肺腑出、出輒愁肺腑」(同・其二)と孟郊を評したのも、その求心的苦吟を認めたからに他ならない。

かくして孟郊の詩風の極点は、「峽哀」十首に現出する。たとえば其五「峽螭老解語、百丈潭底聞、毒波爲計校、飲血養子孫、既非皐陶吏、空食沉獄魂、潛怪何幽幽、魄說徒云云、峽聽哀哭泉、峽弔鰥寡猿、峽聲非人聲、劍水相劈翻、斯誰士諸謝、奏此沉苦言」の発想・用語の暗鬱たるエネルギーは空前のものである。

孟郊のこの特異な詩風を誰が継承し得たか。韓愈はそれを「孟郊死葬北邙山、日月星辰頓覺聞、天恐文章渾斷絕、再生賈島在人間」(贈賈島・『又玄集』引)と、賈島に期待した。だが賈島は五言律詩を中心に独自の、やや格力の弱い詩境を開拓した。⁽¹⁹⁾結論的に言えば、孟郊の継承者は李賀である。孟郊の句法を李賀が学んでいる点については、原

田憲雄氏の指摘が既に⁽²⁰⁾あるから、ここでは一例だけ発想の類似を指摘しておこう。

孟郊に「觀種樹」(卷九)と題する詩がある。

種樹皆待春 樹を種えて 皆春を待つ

春至難久留 春至れば 久しく留め難し

君看朝夕花 君看よ 朝夕の花

誰免別離愁 誰か別離の愁を免がれん

心意已零落 心意 已に零落せるに

種之仍未休 之を種えて仍未だ休めず

胡爲好奇者 胡^{なんす}為れぞ好奇の者

無事自買憂 事無きに自ら憂を買うや

そして李賀に「莫種樹」(卷三)の詩がある。

園中莫種樹 園中に樹を種うる莫れ

種樹四時愁 樹を種うれば四時愁はし

獨睡南牀月 独り睡る南牀の月

今秋似去秋 今秋も去秋に似たり

両者の詩としては平易な表現であるが、発想は新奇である。孟郊は、樹木を植える者に何故に悲哀の種を抱えこむのかと問う。李賀は樹を植えることを拒否する。時間の推移に対する悲哀などより重い虚無的心情を抱いているからである。およそ種樹は士大夫の楽しみの一つであった。た

とえば白居易には「東坡種花」二首、又一首(白氏文集卷十一)「東澗種柳」(同上)「種桃杏」(卷十八)「種荔枝」(同上)など草木を植えて楽しむ詩が多数見られる。その姿勢からは「黃昏獨立佛堂前、滿地槐花滿樹蟬、大抵四時心愴苦、就中腸斷是秋天」(暮立・卷十四)のような常套的な悲秋の感しか出て来ないのである。苦吟派との発想の差は明瞭であると言えよう。

しかし苦吟派の詩はおおむね発想が新奇で、詩語が晦渋で、心情が沈鬱であるために、一般的には好まれなかった。姚合の『極玄集』を継ぐ韋莊の『又玄集』は、賈島・姚合各五首、韓愈・張籍・白居易各二首を収録するが、孟郊・李賀は無い。⁽²¹⁾韋穀の『才調集』も白居易二十七首、賈島・張籍各七首に対して、孟郊・李賀は各一首のみである。唐人選唐詩においてはこうした評価しか与えられていなかった。宋の嚴羽『滄浪詩話』に至って、「大曆以後、吾所深取者、李長吉・柳子厚・劉言史・權德輿・李涉・李益耳」(詩評)と、李賀と劉言史は高く評価されたが、孟郊については「李杜數公、如金翅摩海、香象渡河、下視郊島輩、直蜜吟草間耳」(孟郊之詩刻苦、讀之使人不懽)(同上)と評価は低い。

中唐期の苦吟派の詩は、唐詩の成熟における必然の過程

に出るものであり、その方向を決定づけた孟郊の詩は、文学史により正当な地位を占めて然るべきである。本稿は、その提言のための試論として草した。

注

- (1) 孟郊と賈島を区別する論は、宋の張戒が、韓愈門下では孟郊は別格だとして、「世以配賈島、而鄙其寒苦、未之察也。郊之寒苦則信矣。然其格致高古、詞意精確、其才亦豈可易得」(『歲寒堂詩話』卷上)と言う評に、既に見えている。また嚴羽は「滄浪詩話」において「孟東野體」と「賈浪仙體」を挙げて区別するが、孟郊をあまり高く評価しない(後述)。
- (2) 一例としては、歐陽修『六一詩話』が、孟郊と賈島の貧窮歌を引いて、その不遇ぶりを強調している。
- (3) 本稿では、華忱之校訂『孟東野詩集』十卷(一九五九年、人民文学出版社)をテキストとし、編年詩は華忱之編「孟郊年譜」(同書所収)の比定に拠る。
- (4) 「往河陽宿峽陵寄李侍御」(卷八)。
- (5) それを示す孟郊の詩、「題陸鴻漸上饒新開山舍」(卷五)・「送陸暢歸湖州因憑題故人皎然塔陸羽墳」(卷八)・「贈蘇州韋郎中使君」(卷八)。「春日同韋郎中使君送鄭儒立少府扶侍赴雲陽」(卷八)。なお皎然の「答孟秀才」の詩は孟郊に答えたものと思われる。なお皎然には、陸長源に奉和の詩が七首(『全唐詩』に拠る)もあるから、親しい交際と考えられ、孟郊を紹介した可能性がある。なお戴叔倫(七三二—七八九)に「寄孟東野」

の詩があり、その卒年からみて、やはりこの頃に交際があったと考えられる。

- (6) 李翱の文では孟郊を平昌の人とするが郡望である。孟郊の詩に見える孟氏は十名。十六叔孟簡の外に監、察、十五叔・郎中、十二叔・侍御、叔などの官僚がいる。

(7) 陸長源は、開元・天宝中の尚書左丞陸余慶の孫、西河太守陸璩の子。貞元元年、三十五歳の孟郊が信州上饒県に陸羽の山舎を訪ねたころ、陸長源は信州刺史から転運副使となつたばかりであった。孟郊に「贈轉運陸中丞」(卷六)の詩がある。貞元六年、陸長源は都官郎中より万年県令に遷る。孟郊が「贈萬年陸郎中」(卷六)の詩に「江鴻恥承簪、雲津求能翔」と言うは、官途に就く決心を含んでいるよう。

(8) 貞元十年に汝州、貞元十三年に汴州と孟郊は陸長源の任地に頼り、詩を唱酬している。陸長源の詩は『全唐詩』に三首現存するが、「樂府答孟東野戲贈」「酬孟十二新居見寄」「答東野夷門雪」とすべて孟郊に答酬の作である。孟郊は贈詩十首の外に「亂離」(卷三)で長源の死を悼んでいる。

(9) 本集は「答韓愈李觀別因獻張徐州」に作るが、ここは『文苑英華』に拠った。

(10) 『因話錄』(『全唐文』七百九十一)に「韓文公與孟東野友善、韓公文至高、孟長於五言、時號孟詩韓筆」と見える。著者の趙璘は文宗開成(八三六—四〇)中の進士。

(11) 本集には聯句は三首しか収めていないが『昌黎先生集』卷八に孟郊との聯句十首が見える。これらの聯句に対する評は、

趙翼の『甌北詩話』に「今觀諸聯句詩、凡昌黎與東野聯句、必字字爭勝、不肯稍讓。與他人聯句、則平易近人。可知昌黎之於東野、實有資其相長之功。宋人疑、聯句詩多係韓改孟。黃山谷則謂、韓何能改孟、乃孟改韓耳。此語雖未免過當、要之二人工力悉敵、實未易優劣」と言うのがある。二人が言語能力を傾注した聯句は、その表現力に甲乙つけ難いものがあるが、「城南聯句」などは黃山谷の評が当たっている。

(12) 王建の「哭孟東野」二首（其一是賈島「長江集」にも収めるが、胡震亨「唐音統籤」卷三百五十二では王建作とする）によれば、孟郊宅に出入した可能性がある。注(14) 参照。

(13) 『六一詩話』に孟郊の「借車載家具、家具少於車」（「借車」卷九）と「暖得曲身成直身」（「答友人贈炭」卷九）の句を引いて、「謂非其身備嘗之、不能道此句也」と言うなどがその一例である。なお歐陽修は詩話の中で孟郊・賈島に言及することが多く、また「刑部看竹效孟郊體」（「歐陽文忠公集」卷六）、「彈琴效賈島體」（同卷四）の詩があって、その愛好ぶりがうかがえる。

(14) 郭茂倩「樂府詩集」卷九十・九五の新樂府一六に孟郊の「湘弦怨」「征婦怨」「織婦詞」「長安羈旅行」「求仙曲」「結愛曲」六首を収め、張籍の「征婦怨」「羈旅行」「求仙行」「節婦吟」と王建の「織錦曲」「當窗織」をそれぞれ並べ収めている。張籍が「贈王建」の詩に「自君去後交遊少、東野亡來箴簡貧、頼有白頭王建在、眼前猶見詠詩人」（「張司業詩集」卷六）というたうのも、二人で孟郊の詩風を継承しようとの意識に他ならな

い。

(15) 「送淡公」は元和七年に越中の詩僧淡公が洛陽で孟郊・韓愈等と遊び、南歸するのを送った作。「燕氷雪骨、越溪蓮花風、五言雙寶刀、聯響高飛鴻」（其二）と賈島と五言律詩の名手として並べ、「識本未識淡」とも言っているから初見の人物であつたようだ。「吊元魯山」は元和六年の作。元魯山は元徳秀のことで「新唐書」卓行伝に見える。天宝十三載魯山県令にて卒しているので追弔の作である。清貧の高士に共感したものの。「杏塲」は元和三年の作。夭折の子を悼むもので、「地上空拾星、枝上不見花、哀哀孤老人、戚戚無子家」（其二）「哭此不成春、淚痕三四班、失芳蝶既狂、失子老亦孱」（其七）など、哀情切切たる句が多い。「弔盧殷」は元和五年の作。盧殷については韓愈に「登封縣尉盧殷墓誌」（卷二十五）がある。孟郊は「送淡公」其十一でも「盧殷劉言史、餓死君已噫」と詠じている。

(16) 「感懷」八首には、「登高有所思」「徘徊不能寐」など阮籍の句を借りた表現が多い。また「東方有一士」のように陶淵明の句も借りている。おそらく早い時期の習作であろう。卷三にも「感懷」と題する一首があり、建中三年、三十二歳の作と比定できるので、八首もこの前後の作と思われる。なお「峽哀」十首は卷十哀傷の部に収録されており、詩中に「哭幽魂」「三峽」の語が見えるが、屈原を弔ったものとも決め難い。

(17) 韓愈には他によく知られた「與孟東野書」（卷五）「送孟東野序」（卷十九）の二つの文章がある。

(18) 二字の題は詩集中六十八種を数える。あるいは杜甫の秦州時代以降の詩題のつけ方を意識的に倣ったかも知れぬ。

(19) 賈島の詩風及びそのグループについては、荒井健氏「賈島」(中国文学報第十冊・一九五九年四月)の詳論がある。

(20) 原田憲雄氏は『李賀論考』(昭和五十五年・朋友書店)所収の「帰郷」の章で、韓・孟の「城南聯句」を中心とする聯句と李賀の「昌谷詩」との比較検討をしている。氏は言う、「長吉が師の退之の作品に誘われて、韓・孟の聯句に到達し、その奇古幽深なるに驚愕し魅了せられ、やがて東野を凝視するに至るのは、長安三年の無聊と自卑とを俟たねばならぬ」(同書二〇二頁)と。

(21) 孟郊一首、「歲暮歸南山」を収録するが、これは孟浩然の詩である。

(22) 劉言史に「初下東周贈孟郊」「與孟郊洛北野泉上煎茶」(全唐詩)の詩があり、孟郊に「哭劉言史」の詩がある。皮日休は「有與李賀同時、有劉棗強焉。先生姓劉氏名言史、不詳其鄉里。所有歌詩千首、其美麗恢瞻、自賀外、世莫得比」(劉棗強碑・『皮子文藪』卷四)と、劉言史を李賀に比肩する詩人とする。その詩は『全唐詩』に一卷七十八首現存。たとえば「遠火熒熒聚寒鬼、綠篠欲銷還復起、夜深風雪古城空、行客衣襟汗如水」(夜入簡子古城)の冷幽さ、「花領紅駿一何偏、綠槐香陌欲朝天、仍嫌衆裏嬌行疾、傍縱深藏白玉鞭」(春遊曲)の色彩感、まさしく李賀に通ずる。苦吟派の詩人としてその存在は見直してよい。なおこれらの苦吟派に入れるべき詩人とその詩風につ

いては、次の機会に報告したいと考えている。